

「もともととある」を尊重

文人の 武蔵野

三浦朱門の小説「武蔵野インディアン」は、同じ旧制中学の同窓生4人が久しぶりに集まり、そこで交わされる会話が主となり小説が構成されています。

神主の榎本、不動産業を営む土方、市長の村野は、いずれも先祖代々から武蔵野で暮らす「武蔵野インディアン」で3人はいつも仲間です。その3人が同窓の「東京白人」

三浦朱門 ④

である作家の太田久男をわざわざ呼び出して一席設けることになったというのが物語の発端です。

恒例の小同窓会に特別ゲストで招かれたような格好です。なぜ声がかかったのでしょうか。

3人は、太田が新聞の家庭欄で対談相手の教育学者に「やっつけられた」のをみて励まそうということになったと説明しています。教育についてのその対談では、学校間の格差、個人間の学力格差を埋めることは不可能であるという太田の経験論的な立場を



教育学者が実践論的に否定します。

教育学者の認識は、「落ちこぼれ」を生み出さない教科書や教授法が確立しつつあり、「できる者」と「できない者」との格差は教育によってゼロにできるといふものでした。先天性を重んじるか後天性を重んじるかの違いとも

多摩地域の神奈川県から東京府への移管130周年を記念して行われた展示の様子。作中には、登場人物たちが東京移管について持論を述べる場面がある(2023年撮影、東京市町村自治調査会提供)

言えます。

太田からすると「専門家」に真っ向から批判されてあいすみませんとなったわけですが、「武蔵野インディアン」たちは太田に味方します。太田に同情して義憤らしきものを感じて呼び出したことにはわかるものの、その理由は判然とせず、推測するしかありません。

3人が太田に話して聞かせているのは「武蔵野インディアン」としてのアイデンティティーばかりです。根源にあるのは、もともととある自然や

もともとと住んでいた者の権利を考慮してほしいという願いです。その姿勢はもともと備わった生得的な資質を重んじて教育を考える太田に劣勢になつてほしくなかったことにも繋がるように思われます。

3人が、「われわれの声」として「東京白人」の太田に託したのは、第一に、先住民と先住民が守ってきた生態環境や教育環境、地形や地理的区分などの尊重ということになるのではないのでしょうか。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。